

Fletcher, John ed. Information Sources in
Economics. 2nd ed.

London, Butterworths, 1984. xii, 339p.

中 村 弘 光*

1971年に同じ Butterworths 社から、*The Use of Economic Literature* として刊行されていたものの改訂第2版で、大体の構成・性格は大きな変化はないが、若干の章が加わり、執筆者は大幅に変わり、各章は大部分新稿になっている。旧版のほうは、当誌「経済資料研究」(No. 6, 1973. 2)に宮地見記夫氏による書評が掲載されているので参照願いたい。

新版も旧版と同じように、ライブラリアンと経済学研究者計22名によって執筆され、前半部に、経済学図書館の利用、参考図書と書誌的ツール、政府刊行物等々についてライブラリアンが執筆を担当し、12章以降後半部は経済学各分野にわけて主要文献・参考文献を概括するという方法をとっている。後述するように、全体は新・旧版はともに24章で構成されているが、前半部分では、コンピュータ処理データベースの急増という事態を背景として、第7章「データベースとデータバンク」

が新しく加えられ、後半部分では旧版の第17章「景気循環、短期的経済の安定、価格と所得」と第14章「数理経済学」の章が新版では第15章「経済理論」のなかに吸収され、旧版の第22章「財政学」は新版では「公共部門経済学」(Public sector economics)に変型し、旧版の第24章「経済社会学」(Economic sociology)は削除され、新たに、「社会経済学」(Social economics)(内容は、教育、保健、住宅の経済学、社会保障)にさしかえられている。

1. 序論 John Fletcher

2. 図書館と文献調査法

John Fletcher

3. 経済学図書館の利用

Charles S. Crossley

4. 参考図書と書誌的ツール

Michael Shafe

5. 定期刊行物 John Fletcher

6. 未刊行資料 John Fletcher

7. データベースとデータ・バンク

* なかむら ひろみつ 元アジア経済研究所

Allan Foster

8. イギリス政府出版物

Priscilla J. Baines,
Robert C. Clements

9. アメリカ政府出版物

J. A. Downey

10. 国際機関出版物 Eric C. Blake

11. 統計資料 Colin H. Offor

12. 一般経済学 John Fletcher

13. 経済思想史 R.D. Collison Black

14. 経済史 G. N. von Tunzelman

15. 経済理論

1. マクロ経済学

Marcus Miller

2. ミクロ経済学 Paul Weller

16. 計量経済学理論と方法

C. E. V. Leser

17. 工業経済学 David Morris

18. 経済発展, 成長ならびに計画

Alan R. Roe

19. 労働経済学 Robert M. Lindley

20. 農業経済学 A. J. Rayner

21. 金融経済学 Geoffrey E. Wood

22. 公共部門経済学

Peter M. Jackson

23. 国際経済学 John Williamson

24. 社会経済学 Susan Charles

この新版の序論で, 「1950年代, 60年代に他の学門分野と同様に, 経済学文献産出量は劇的に増加した。70年代, 80年代には, 筆者には, 恐らく, 図書

価格の高騰, 図書館予算の限界の結果としてであろうが, 雑誌文献が急速に拡大しつづけるにもかかわらず, モノグラフ形式の経済学文献の成長率は鈍化するように思われる。これらの特質は, 未刊のあるいは半刊 (semi published) 資料の「灰色」(‘grey’) 文献¹⁾の価値増大とともに, 経済学図書館員 (economics librarian) にとって諸問題を創りだしている。」(p. 1) と指摘し, すぐそれにひきつづき, 「しかしながら, この20年間に, われわれは多くの大規模なアカデミック図書館, 政府図書館において, 主題専門図書館員 (subject specialist librarian) という概念が発展しているのを見ている」

(p. 1) とのべ, 専門主題・部門に通曉したライブラリアンの重要性に注目する。旧版ではこのような主題専門図書館員という言葉は使用されていない。

ひきつづき, 経済学内部の専門分化・細分化, また国際的主題の拡大, その経済学への影響にも注意しなければならないとしている。

編者は全体の構成を概括したあと, この新著の企図を次のように述べている。

経済学者および経済学者を志向している人々に対し, 次の三つのことについてのガイドをあたえることを企図している。

1) ‘grey’ literature の適切な訳語を未知のためそのまま「灰色」と訳した。御教示願いたい。

(1)主題の諸々の分野についてどのような資料があるか、何が重要で価値ある資料か、その資料はどのようなレベルにとってもっとも役立つか。

(2)研究者の専門分野に関する文献のさらに拡張的でまた intensive な文献サーベイを行う時に研究者を援助するツールはどんなものがあるか。

(3)どこに行けば資料が見つかるか。

このところに関する限り、編者 Fletscher の文章は全然変っていない。

この意図を、この新著がみだしているかどうかは問題であるが、経済学の全分野にわたるこのような参考文献案内を評定することは評者の能力をこえていると思われるので、ここでは気づいた点の指摘にとどめたい。

新・旧両版では共通の執筆者も多いが、そのような場合には、旧稿の一部手直しになり全面的改稿ではない。例えば、「定期刊行物」はともに J. Fletcher であり、経済学学術誌をプレステイジ学術誌 (*American Economic Review*, *Economic Journal*) 「第2線」 ('Second-line') 学術誌 (*Economica*, *Oxford Economic Papers Quarterly Journal of Economics*, *Journal of Political Economy*, *Review of Economics and Statistics*, *Econometrica*, *Review of Economic Studies*) とランク付けをしているが、ここまでは各誌の説明はやや短くするという変更があるだけである。そのつぎに、各国経済学雑誌 (National

economics periodicals), 地域雑誌 (Regional periodicals) という区分を作り、前者に各国全国学会の会誌 (*Economic Record*, *Canadian Journal of Economics* 等。しかしここに日本からは、英文経済学雑誌として、*International Economic Review* と *Otemon Economic Studies* が入っている) 後者には *Manchester School of Economics* 等があげられている。旧版にはなかった分野別雑誌リスト (農業経済学、開発経済学等々) は誌名と創刊年だけで書誌的データも不十分であり解題もない。

第13章「経済思想史」(旧版第12章) は R. D. Collison Black (クィーンズ大学、ベルファスト) の執筆であるが全面的に改稿され、ページ数は9ページから15ページにふえている。経済学説史・思想史の再認識、研究文献の増大ということが背景にあらう。ここでは日本経済史学会、その *Annual Bulletin* も紹介され、山田秀雄『社会科学年表』第1巻も紹介されているし、一橋大学のカール・メンガー、J. A. シュムペーター、パート・フランクリン文庫にも重要なコレクションとして言及している。この章は非常に詳細な文献案内といえよう。

第18章「経済開発、成長ならびに計画」は執筆者が変わっているので、当然まったくの新稿である。2期に分けて、第2次大戦直後期、1960年代とその後の新概念として、研究文献の特徴を簡

潔にとりまとめている。狭義の経済開発論だけでなく、R. Prebisch やまたネオ・マルキシストの A. G. Frank の従属論にも言及し、「開発研究」の interdisciplinary な性格にも注意している。ページ数は、旧版の9ページが12ページにふえただけであるので、旧版にあった経済開発研究専門誌ならびに開発途上国自体で刊行されている経済研究誌のリストは除外されている。

この文献案内は、もちろんイギリスならびに英語国民を主たる対象と考えていることもあり、宮地氏も指摘されているように、各章ともに英語文献、とくにイギリス刊行文献に重心が置かれている。前述の「経済思想史」は例外ともいえよう。また第12章「一般経済学」(John Fletcher)の抄録・索引の項で、「言及にあたいする3つの

地理的に特化されたサービスとして『経済学文献季報』(年間約15,000点を採録)」を、ハンガリーの *Abstracts of Hungarian Economic Literature* フランスの *Documentation Economique* とともにふれている。

ライブラリアンと研究者との協力によってこのような「文献ガイド」が作成されることは好ましいことであり、この新しい叢書 Butterworths Guides to Information Sources の一冊として刊行された *Information Sources in Politics and Political Science: A Survey World Wide*, ed. by D. Englefield, and G. Drewry, London Butterworths, 1984. も同様に全体で24章で構成され、そのうち9章は主題専門ライブラリアンが執筆を担当している。

編集後記 「経済学文献を語る」(2)は、はしがきにもあるように前回の続編として計画されたもので、杉本先生から貴重なお話をうかがい、記録に残すことができた。だが、この原稿の整理に予想以上の時間を取り、そのために他の執筆者には大変ご迷惑をおかけした。ふかくお詫びもうしあげる。

創刊号からほとんど毎号掲載されてきた「レファレンス・ボックス——近代日本経済関係2次文献」の企画の狙は、前回の「経済学文献を語る」の細谷発言に詳しいが、17年経過したいま、『日本経済資料ハンドブック』(仮題)として一冊の形あるものにする作業が進められ、予定どおりならば2年先には出版される。息が長いということなのか、それとも、あまりにも時間がかかりすぎたというべきなのか、いずれにしる「協議会らし仕事ぶり」ということは言えそうである。

この号は欲張って、書評を3本掲載した。評者に人を得て、タイプの異なる批評を味わって頂けるものと思う。

編集者が多忙という口実で、個人会員の田口さん、東経大の皆さんに校正その他でご協力いただいた。感謝もうしあげる。(菊川)